
Coffee Brake

ベゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C o f f e e B r a k e

【Nコード】

N 3 7 9 2 K

【作者名】

ベゼル

【あらすじ】

ベゼルが織りなす短編小説集。一緒にコーヒーはいかがですか？

読まれる前の注意

この小説は毎回数分程度で読み終わる短編小説集です。長編だけが好きな方々には申し訳ありません。また、この小説はある意味私の執筆修業のようなものです。毎回読みごたえがあるような小説を目指して書いていますが、まだまだ未熟者のため見苦しい点は多々あります。なので温かい目で見守っていただけると幸いです。最後に、こんなテーマで書いてみて欲しいなどというご要望がありましたら、遠慮せずおっしゃってください。喜んで書かせていただきます。

他にも試作品として書いてあるものも投稿しようかなと思っています。

では。

さくら（前書き）

テーマ『再会』

さくら

さくらって。なんだろう。

そう僕は思いながら、満開の桜が散る木々の下から心が透き通る青空を見上げる。空はまるで応えるように雲一つなく、微笑んでいた。サアっと、風が僕の頬を摩る。

僕は改めて、片手にあるお守りを見た。

十年前、君がくれたものだ。

思い出って。なんだろう。

お守りの中には、皺くちやになった紙が一枚入っている。その紙には、君の優しい文字が哀しんでいた。

また。逢いたい。

十年前。君はそう嗚咽しながら、必死に僕に叫んでいた。まるで子供のように。まるで恋人のように。

だけど今、君はどうしているんだろう。

十年の月日は、まだ若い僕らにとってはとてつもなく永く、とてつもなく残酷だ。…いや、たしかに残酷だったというべきか。……いや、そう言いたい。

「桜…くん…?」

振り向くと、そこには一人の愛らしい少女いた。…いや、女性が

いた。十年の月日は少女を女性にしたようだ。

「十年は…永かった？」

「…うん。永かった。」

僕らの間をピンク色の花びらが流れる。

「十年は…短かった？」

「…うん。短かった。」

風が上空へと昇る。

「君の中の僕は…何色かな？」

「…さくら色よ。」

女性へと成長したはずの少女と僕は、さくら色の気持ちを確かめ合いながら、子供らしい口付けを交わした。

あなたのさくら色は、何色ですか？

さくら（後書き）

もつそろそろ春になりますので書いてみました。
ご意見・ご感想お待ちします。

試作小説【CANARIA 0】

目を開くと、そこには鬱蒼と繁る森林が広がっていた。

「…えっ？」

カサ…

私は落ち葉を払いのけながら、身を起こす。落ち葉の量から見て、私は相当寝ていたようだと分かる。服はモスグリーンを基調とした【かんながくいん神流学院高等学校】のセーラー服だ。…おかしい。私はお気に入りの花柄のパジャマを着て、フカフカのベットに寝ていたはず。なのに森の中で寝るというトレジャーなことはしないはずだ。

——ギヤギヤっ！！

「キヤアっ！！」

私は咄嗟に頭を抱える。名も知らない鳥が森を翔けていった。以前祖父母が農家である男友達から、誰もいない森はどんなお化け屋敷より遥かに怖いと聞いた覚えがある。その言葉の意味がありありと分かる。

かなり。怖い。

私は身を震わせながら、腰下まである自慢の長い黒髪を整え、ゆつくりと。ゆつくりと立ち上がった。そして誰かいないか、必死な思いで見渡した。

「誰か…誰かいないのっ!？」

若干裏返った私の声は虚しく森に響いた。見渡すかぎり拡がる平

坦な森の遠くには、薄く白みがかった。

カサ…カサ…

私は心臓をバクバクと鳴らしながら、近くにあった木にもたれかかった。そして身をまるくする。想像して欲しい。何も知らない女子高生の自分が、突然右も左も分からない状況になったときの気持ち。

誰でもいい。とにかく知人、できれば友達と逢いたい。じつと。してられない。

私は怯える自分を叱咤し、歯を食いしばりながら顔を上げる。そして改めて見渡した森の中は、変わらず幻想的な静けさと儼かな空気がながれている。

「…あつ、携帯っ!!」

私は一縷の望みをかけポケットの中を荒く探す。すると望んでいた感触が指先に当たった。

「ラッキーマッ!!」そうして携帯を開く。

…が。

「圏外…マジで…」

私は腰を抜き、お尻からペタンと座り込んだ。

…でもまって。私が契約している携帯の会社は、電波の通りになり売りにしているから、少し歩けば繋がるかもしれない。

「よし…天音^{あまね}、行くわよ。」

と、私は自分に言い聞かせ、再度立ち上がる。心臓も今さっきほどは暴れていない。段々落ち着いてきた。

…大丈夫。何とかなるわ。

私はとりあえず、その男友達【澤村^{さわむら} 曉人^{あきし}】が言っていたことを思い出す。曉人は中学時代、同じ吹奏楽部のパート別練習の休憩中に話題として、たまに山について話してくれた。

「山歩きに必要なのは、やっぱり杖だな。」

「杖？」

「ああ。山って案外滑り易いし、草が結構邪魔だしな。かなり役に立つ。」

「なあんだ、猪とかと戦うのかと思った。」

「…あんなあ喜多^{きた}、猪に襲われて死んだやつとかいんだぞ？」

「いや、ミツルって結構強いじゃん。」

「さすがの俺でも逃げるわっ！！」

「…ハハハっ！！」

「棒…ないかな…」

私は周囲の足元を見る。すると適度に長く太い棒を見つけた。

「…よし、とにかく下ろう。多分そっちの方がいい。」

私は拾った棒を一振りすると、それを杖のように扱い獣道を下った。獣道は幅が１メートルもないが、女子高生ながら小柄な私には十分だった。地面は湿っており、かなり滑りやすかった。だけど、棒があったおかげで転ばずにいられた。

ガサ…ガサガサ…

「誰っ！?!?!?!」

私は体を小さく丸めながら、揺れた草むらの方を見た。

こんなところで変な男と出くわした最悪だ。私は以前変質者に襲われたことがあるから、尚一層緊張する。あのときは曉人がいたら助かったけど、今はどうすることもできない。

ゴフウ…ゴフウ…

「ふう…?」

すると出てきたのは――

「——イノシシっ！？！？！？！？！？！？」

大人何人分にもなろう異常に大きいイノシシだった。っていうか、イノシシってこんなに大きいのか！？

焦げ茶色のイノシシは鼻から荒く水色の息を吐き、全身で呼吸をしていた。

「あんなあ喜多、猪に襲われて死んだやつとかいんだぞ？」

「さすがの俺でも逃げるわっ！！」

あつ、
 暁人が逃げるんなら……私は……

ブンッ！！

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアつ!!!!!!!!!!!!!!
 !!!!!!!やめてっ!!!!来ないでえっ!!!!」

私は棒を投げ付け、必死になって逃げ出した。

ガサガサガサガサっ！！！！！！！！

$$T \cup T \cup T \cup T \cup T$$

スカートだけど関係ないっ！！！！

$$T \cup T' \cup T'' \cup T'''$$

しっ死にたくないっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

私は必死になって逃げ続ける。元々運動はかなり得意だったけど、自分ながら驚異的な速さで走り続ける。

私ってこんなに速かったっけっ!?!?

多分【火事場の馬鹿力】ってやつかもしれないけど、今はこのイノシシから何とか逃げる事ができている。

「誰かっ……誰かあっ!! 助けてえっ!!!!!!!!!!!!!!」

「——テンちゃんっ!! 伏せてっ!!!!!!!!!!」

その時、目の前から視界を埋める程の大きな茶色の馬が、私の頭上を飛び越えた。

ドテっ

「キヤアアっ!!」

私は呆気になり、足がもつれて倒れた。

——バキュユンっ

バチバチバチっ!!!!!!!!!!

グオオオオオオオオっ!!!!

どうすることもできず、私は頭を両手で抱え伏せ、後ろでは『何が放たれる音』『多分放電した音』『イノシシの悲鳴っぽい声』が聞こえた。

——バキュユンっバキュユンっ

バチバチバチバチバチバチっ!!!!!!!!!!

ガアアアアアアアっ!!!!!!!!!!

「ノーヴィア、決めなさいっ!!」

「おおよっ!!」

私を呼んでくれた女の声に応えて、野太い声が聞こえた。

ブウンブウンっ!!!!

ドスっ…

ブシャアアアっ!!!!

オッオッオオオオオっ!!!!!!!!

「ウオっシャアアっ!!久々の大物だぜっ!!!!」

「やったかつ!!?!!」

「アユミ、ノーヴィア、凄いですっ!!」

私の後ろには数人の男女の声が聞こえる。どうやらイノシシは倒されたらしい。

「——テンちゃんっ!!テンちゃんだよねっ!!大丈夫っ!!?!?!?」

「テン…ちゃん…?」

私は恐る恐る顔を声の方へと向けた。

そこには見知った顔があった。

「あゆみ…ちゃん…?」

「そうよ【喜多^{きた}鮎美^{あゆみ}】よっ!!テンちゃん、怪我はないっ!?!」

「ない…けど…」

小顔に艶やかな短い黒髪。大きくなりつとした目。いつもニッコリと笑みを浮かべていた小さな唇。間違いない、あゆみちゃんだ。

だけど…

「けど？」

「その格好…なに？」

土に汚れているが白のローブに身を包み、両腕は露出しているがガードを着け、背中には弓を背負っている。

まるでRPGに出てくる弓を使う女性キャラのような服装だ。

「……ああ…これは…ね…」

「——おいアユミ、【エスペリウス族】の友達は大丈夫だったか？」

「ええノーヴィア。怪我はないみたいだけど、転んだみたいね。」
「そいつはよかった。」

あゆみちゃんの後ろから身長が2メートルくらいの筋骨隆々の大男が、大きな斧を担いで近づき、腰を下ろして私に大きな顔を近づけた。茶色がかった赤い髪がかなり適当だけど、かなり男らしい。

あれ…この人なんで…

「にしても、よく【ジャフリー】から逃げ続けられたな。【エスペリウス族】はこんなに身体能力があるのか？」

「さあね、ブルガー。」

ブルガーと呼ばれた男は、ノーヴィアさんとまではいかないがかなりの高身長で、片手には真っ赤な水晶が付いた杖を持ち、私に近づき私の顔を見た。金髪でなかなかのイケメンだ。

あれ…この人も…

「アユミ、大丈夫なら動くです。ここらへんは【ザムナー】の本拠地の近くです、襲われたら大変です。」

「分かってるわ、エレナ。」

エレナと呼ばれた若い女は私くらい背が低くて、真っ白の髪のしただで鷲色の目をくりくりとしていてかなり可愛い。

え…この人も…

「【ジャフリー】は？」

「もう紐に括りつけた、後は離れるだけだ。」とブルガーさんが言った。

「さすがに早いわね。なら早いとこ村に戻りましょう。」

「あのさ…あゆみちゃん…」

「どうかした、テンちゃん。立てないの？」

「いや、何とか立てるんだけど…」

「ならどうしたの？」

私は先ほどから気になっていたことを言った。

「この人たちには…何で【耳】とかを付けてるの？」

ノーヴィアさんには、【牛】の耳と角と尻尾。

ブルガーさんには、【猫】の耳と尻尾。

エレナさんには、【兔】の耳と尻尾。

三人の耳と尻尾は機械では考えられないほどの自然な動きをする
が、『コスプレ』で付けているとしか思えない。

「…あのね、テンちゃん。三人の【耳】とか【尻尾】とかは生えてるの。」

「えっ…【人間】——」

「【人間】じゃないの。ノーヴィアは【ヴァイルシャ族】、ブルガーは【アオリス族】、エレナは【ラヒシュタイン族】なの。」

「人間じゃ…ない…？」

「——ほら、触ってみろ。」

ブルガーさんは無理矢理私の手を取り、自分の【耳】に触らせた。

「温かい…血が…通ってる…」

間違いなく耳は温かく、生気を感じられた。

「…テンちゃん。実はね、私たち…」

あゆみちゃんは、真顔で有り得ないことを言った。

「【異世界に飛ばされた】の…私たち…」

私の意識はそこで途切れた。

シヨートシヨート【とある日の風伯部隊】（前書き）

「魔法少女リリカルなのは V A Y U 〜風の伯爵〜」で登上する
「ルーシア・シルフィード」と主人公の、また「ソアラ・カビーネ」
と主人公の、シヨートシヨートです。

ショートショート【とある日の風伯部隊】

「…あのさ、ルーシア。なんでおまえここにいんだよ？」

「…気分。」

「気分で片付ける癖いい加減に直せ、後ベットからおりろ。」

「…リヨウさま、いい香り。」

「だから潜りこむなってっ！！なのは姉さんが見たらどうなるかわからねえんだぞっ！！」

「…なのはさま、おはようございます。」

「なのは姉さんはここには……いた。」

「——リヨウくん、お仕置きしなきゃね。」

「…いや、あの、ね、これは、ね、」

「ルーシアちゃん、ナイス。」

ぐっ (↑親指をたてる)

「オメエらグルかつ！！——いや、ちょ、姉さん、最近、ストレス溜まってるから、って、それは——。」

この後、小さくなったりリヨウが隊舎内を駆け回るのは別のお話。

「あの…リヨウさま…」

「どうした？ソアラ。そんな体を震わせて。」

「やつ…、やっぱり…人って…怖い…です…」

「…急に哲学的な話になったな、どうしたんだよ。——なあ、髪がかなり濡れすぎてないか？…まさか。」

「普通の人って…あんな接し方を…されるんですね…」

「いや、はやて姉さんを基準にすんな。…つか、まだ他人の胸を揉むあれやってたんだな。」

「リヨウさまは…されたことがあるんですか…？」

「…は？」

「…いつ、いえ…先程はやてさまが——。」

数分後、鬼神となったりリヨウがはやてを追い回したのであった。

ショートショート【とある日の風伯部隊】（後書き）

これは実は、璃燐さんとたなとさん個人のために書いたものですが、出してもいいかなと思います。

これからこういうショートショートを出していきたいと思います。これくらいなら数分で終わりますからね。

Ladies & Gentleman プロローグ（前書き）

野球ものを書いてみました。

Ladies & Gentleman プロローグ

透き通った青空が、生まれ変わった地球を見下ろす。

2502年4月7日。

21世紀まで汚染によつて地球は回復不可能と言われるまで荒んでいたが、人類の英知と努力のおかげで汚染は完全に失くなり、異常にまで浄化されていた。

「ふあ…よく寝た。」

今年高校1年生となる原野夏紀^{はらのなつぎ}はゆつくりとベットから体を起こす。どの時代でも学生は朝が苦手のようだ。

「——なつきいゝ起きなさあゝいつ!!」

「起きたよっ!!」

母が映る空中に現れたパネルに夏紀は言い返した。

また、いつの時代も息子は母親から起こされることも変わらない。「今日から高校生か。やっぱり変わらないかな…、って当たり前か。カーテン、開けて。」

カーテンが独りでに勢いよく開くと、朝日が部屋の中へと飛び込んだ。夏紀はううんっ…と背伸びをしながらその朝日を全身に浴びた。

「でもまつ、新しいチームに入るんだ。きつといいことがあるよ。」

「すらつと背が高く、野球青年らしく短い髪に、小顔でまるで子犬のような笑顔をすると夏紀は急いで制服へと着替えだした。」

2249年。ついに人間は自らの遺伝子を操作した。^{コイディネット}しかし安全性が完璧に確認されていたが、世界中で行われていた遺伝子操作は^{ゲノム・コイディネット}第三世代になって弊害が見つかった。

それは『男の幼児が10人のうち1人しか生まれない』というものだった。

もちろん世界中でその弊害を解明し克服しようと努めたが、25

0年経った今でさえも見つかっていない。なので今学校の生徒比率が男子学生1人に対して、女子学生が10人というのはもはや常識となっている。

この男子の極小化に伴って最も痛手をうけたのは、やはり【野球】だった。公式では女性禁制だったこのスポーツも始めは体制を変えなかったが、野球の視聴率低迷によりついに2401年に女性の参加を許可した。

そして今。野球選手のうち9割以上が女性となり、野球も女性がやるスポーツであると認知されつつある。

「今日から部活に参加していいから、グローブも入れてっつと。」
文字の完全情報化が進み、昔では考えられないほど軽くなった通学靴を持つて、身支度を済ませた夏紀は一階へと駆け降りる。

「母さん、雪菜さん、おはよう。」

「ああ、おはよう。」

「おはようございます。」

昔ながらの木材を多用した新築の家のリビングに入ると、コーヒーを飲んでいるいつも無表情の母の明美といそいそと朝食の準備をしているアンドロイド・メイドの雪菜がいた。

「…父さんは？」

「昨日飲み会に行ったまま夢の世界で楽しんでるよ。」

「…ああ、酔い潰れたんだ。」

母の回りくどい話に夏紀は苦笑した。

「夏紀くん、今日はオムレツだけでもいいよね？」

「うんっ、お願いします。」

「はあ〜い。」

メイド服の雪菜は夏紀の朝食を作るべく、またキッチンへと戻っていった。

アンドロイドが実用化されてから早くも約350年が経った。かなり高度になったAIに伴い約150年前に人権が認められ、今ではこのように日常の光景となっている。社会では専門職が少ない今

では特に重宝されており、男性人口が減った今ではアンドロイドと結婚するのも珍しくはない。

「あんた、高校でも野球をするんだよね？」

「うん、そのつもり。」

夏紀はコップにオレンジジュースを注ぎ飲み、体に潤いを行き渡らせる。

「あんた…分かってるだろうね？」

「もちろん、だから今日は外野手用のグローブも持っていくよ。」

「へえ…外野もできるのかい？」

「母さん、僕はどのポジションはある程度できるよ。外野も結構楽しいしね。」

「そうかい、なら安心したよ。怪我人は出したくないしね。」

「アハハっ！…まあ、『やりたくない』と言えば嘘になるけどね。」

「あんたは生粋のだからね…、あたしも気持ちは分かるよ。何、相方ができるまでの辛抱じゃないか。待ちな。」

「うん、楽しみに待つよ。」

会話が一区切りしたところで雪菜は夏紀の前に皿を置いた。

「——はい、できましたよ。」

見事な湯気と出来立ての香りがたつ雪菜のオムレツは夏紀の好物である。

「ありがとうございます！…いったんいただきます。」

「はい。」

見ているこちらが気持ちよくなる夏紀の食いつぶりを雪菜はニコニコしていた。

「雪菜。」

「はい、なんですか？」

「今日は首脳と少し話があるからスーツを出しておいてくれ。どれにするかは任せる。」

「承知しました。」

夏紀は最後にコーヒー牛乳を一気飲みし、食事を終えた。

「ごちそうさまっ！！美味しかったよ、雪菜さん。」

「はい、お粗末さまでした。」

夏紀は慌ただしく鞆を持ち、玄関へと走った。

「なっ、夏紀くんっ！！お弁当っ！！」

雪菜は風呂敷に包んだお弁当を渡す。本来風呂敷は要らないのだが、やはりあるのが弁当だというのは変わらないようだ。

「あっ、うんっ！！ありがとうっ！！」

夏紀はショルダーバックの底に弁当を置き、靴紐がないスニーカーに足を入れると、自動的に靴が夏紀の足に合わせ閉じた。

「安全装置セフティがついてるからって油断するんじゃないよ。」

「分かってるよ、あっちにいたときはずっとバイクで通学してたんだ。母さんは今日遅いの？」

「いんや、今日は控え。ちょっとやってきたら帰るよ。」

「そっか。雪菜さん、帰るときはメールするから。」

「うん、お願いね。」

「それじゃ、行ってきますっ！！」

夏紀は玄関から飛び出した。

今日からもっと楽しい日々が待っているんだ――。

夏紀は躍動した。

<

Ladies & Gentleman 第1話 出会い

夏紀は殆どが女子高生の人ばかりをかき分けて、校門から入ってすぐの所にクラス表が掲示されている大きな画面を桜舞い降りる中見上げた。

えーと、僕の名前は… あった。A組の21番。

「——うわっ!!」

夏紀は突如肩を組まれ驚いた。

「よう、お前もAクラスか？」

身長が170cm弱ある夏紀と同じくらいの背が高い、綺麗に日が焼けた髪がショートよりのロングのほりが深い好青年がそこにいた。

「えっ？ あつ、うん。『お前も』ということは君も？」

「ああ。俺の名前は『喜村^{きむら}勇哉^{ゆうざ}』、よろしく頼むぜ？ 相棒？」

「あつ、相棒？」

「だろ？ 今年は特に少なく男子がてな、各クラス男子が2人しかないんだ。」

夏紀がこの春入学した【私立神流学院^{かんながくいん}高等学校】は1学年につき約30人の5クラスあり、例年ならば各クラス3人いる計算になるが、勇哉の言う通り今年に限って男子は少なかった。

「そっか…。それじゃよろしくね、僕の名前は原野夏紀。僕のことを夏紀って呼んでいいから、勇哉って呼んでいいかな？」

「ああ、もちろんいいぜっ!! いやあ夏紀みたいに明るいやつでよかった、中学のころはブツブツしゃべるやつでめんどくさかったよ。」

「アハハっ!!」

夏紀も心の中ではホッとしていた。殆どハーレム状態の機会が多くなる今の時代では、数少ない男友達とどれだけ仲良くなれるかが男子の処世訓である。夏紀もうまくいかないときがあり、孤独感を

身に染みたことはあつたので尚更である。

「んじやいこうか、相棒。」

「うん。」

夏紀と勇哉は人込みから抜けるべく肩を組んだまま歩き出した。

「——是非ともバスケ部につ——！」

「——一緒にテニスをやりませんかっ!？」

「——サッカー部員募集中ですっ!——！」

すると突然三人の美人と言っても過言ではない女子生徒たちが、夏紀と勇哉に殺到した。この時勢では男子は女子から言い寄られることはよくあるので、夏紀と勇哉はさほど驚かなかった。

「夏紀、どれか入りたいやつあるか？」

「ううん、ない。勇哉は？」

「俺もない。——つうわけで通してくれや、先輩方。」

勇哉は無理矢理三人を押しつけ、夏紀は勇哉に続いた。

「そつ、そこを何とかっ!——！」

「どうかテニス部につ——！」

今のチームスポーツではある程度の規制はあるが男女混合が許可されている。つまり男子がいる方が有利なのである。個人競技は大して関係はないのだが、夏紀と勇哉のような美青年はやはりどの部活でも入って欲しいのである。

「あつ、あにようつ!——！」

取り囲む三人の美少女の向こうに、庇護欲を駆り立てる小さな小さなほわほわした可愛らしい少女が現れた。

「あにようつ？」

「やつ、野球部に入ってくれえましえんかっ!?!?!?!？」

「……どんだけ囃んでんだよ。」

その少女の叫びにその場にいた男女は思わず動きを止めてしまう。すると場が沈黙し、少女は顔を真っ赤に染め泣き出しそうになる。

「——夏紀。」

「——なに？」

「俺。中学のとき野球部にいたから野球部に入ろうと思ってんだけど、お前は？」

「奇遇だね、僕も野球部に入る気でいたんだ。」

するとにぱあつと少女は笑顔を浮かべ、その小柄な体では考えられない力で三人を押しのと二人を引っ張っていった。

「くそう、泣き落としがあつたか……」

「いや、違うから。」

バスケット部を勧誘していた女子に二人は突っ込んだ。

「——武藤隊員、よくやった。」

「えへへ。ありがとう、ふーちゃん。」

少女は肩を組み仁王立ちするクールな空気を醸し出す美人女子生徒へと引っ張った。女子の腰まである長い黒髪がなびく。

「私は野球部キャプテンの【氷室風子】だ。そして今君たちの裾を引っ張っているのは【武藤香苗】むとうかなえ隊員だ。」

「よろしくね。」

「あつ、よろしく願います。」

「よろしく願います。」

夏紀と勇哉は慌てて頭を下げる。

「さて君たちに一言言わなければならぬ……」

「なんですか？」勇哉は眉をひそめる。

「ロリコ——」

「それ以上は言わせませんよっ！！僕たちはちゃんとした理由で野球部に志願したんですっ！！不純な動機ではありませんっ！！」

「……ふむ、そうなのか。それは残念だ。」

「何がだ……」勇哉は苦い顔をした。

勇哉は夏紀にナイスと送った。新しく始まる今にロリコンなどと言われてしまえば、嗜好きの女子高生たちに瞬く間に根も葉も無い話が広まっていくだろう。二人は考えただけでも奮え上がった。

「——風子先輩っ！！また後輩をいじらないでくださいっ！！」

「むっ、安達隊員。そちらはどうだ？」

「経験者を3人ゲットしましたっ！！今年は豊作ですよっ！！」
署名用の電子ボードを持った女子生徒が風子に近づいた。ウェーブがかかったセミロングに大きな瞳ときりっとし、しかも胸もなかなかポリリウムがある美人だった。

ほお…こいつは。

勇哉は目を輝かせた。一方夏紀は勇哉はこういう人が好みなんだと知った。

「いやっ、大豊作だ。武藤隊員のおかげで、ようやく男子生徒の獲得したのだっ！！——おっとこれは失礼した。彼女は副キャプテンの【安達麻衣^{あたちまい}】隊員だ。ちなみに私と武藤隊員と違って新2年生だ。」

「えっ！？本当に入ってくれるのっ！？！？ありがとっ！！」

「ええっ！！一緒に野球しましょうっ！！」

勇哉はすぐに麻衣の手を掴み握手した。

「うんっ！！よろしくねっ！！——じゃあ、名前とクラスと出身中学と投打とポジションと基本打順をここに書いて。」

「はいっ！！」

勇哉はすぐに『喜村勇哉・A組・御手洗中・左投左打・シヨート・4番』と書き記した。

「——ほう、これは去年全国大会準優勝した御手洗中とはなかなか素晴らしい。しかも喜村隊員は4番とは…」

「すごおいつ！！」

「本当に入ってくれてありがとっ！！」

風子、香苗、麻衣は賞賛した。

「いえいえ」

「へえ！勇哉って凄いんだ。」

「ほらっ、お前も書けよ。」

勇哉は夏紀に電子ボードを渡し、夏紀は手にもった。

…これは一旦のを聞きたいんだよね？でもどうせいないから…、ならこれでいいか。

『原野夏紀・A組・アルテミス・左投両打・センター・1番』と夏紀は書き記した。

「アルテミス……？始めて聞くが？」

「ああ、去年まで僕アメリカにいたんです。だから。」

「アメリカかあ。」

「でも外野手は貴重だからうれしいよっ！！ありがとっ！！」

「あつ、いえ。」

……あれ？

「アルテミス……どっかで……」

一方、勇哉は考えこんだ。

「——なあ夏紀、アルテミスって有名だったりするか？」

「いや、たいしたところじゃない所だよ。」

「……そうか、悪かったな。」

「ううん、気にしないでいいよ。」

「では、とりあえず君たちは野球部へと迎えいれよう。なので君たちはホームクラスへと行くがいい。新な仲間が待っている。部活は放課後來たまえ。」

「分かりました。勇哉、行こう。」

「ああ。」

二人は校舎入口へと向かった。

「——喜村くんはなかなかの掘り出し物だね、即戦力になるよ。」

「そうだね、まいちゃん。」

と麻衣と香苗はボードを見ながら言った。

「……いや、原野隊員もなかなかの……いやかなりの掘り出し物なのかもしれないぞ。」

「えっ？」

「ふーちゃんどうして？」

「喜村隊員が賞賛されているにも関わらず、原野隊員は全く怖じけなかった。これは自分も賞賛され慣れているからだろう。」

「…ですけど、原野くんは『たいしたことない』って言ってましたよ。」

「謙虚そうな原野くんだ、そう言ってもおかしくない。…まあ、放課後の練習試合でそれを確認するでしょう。その真偽をね。」

風子は不敵に笑った。

体育館で行われている入学式は淡々と進む中、夏紀と勇哉は隣に座る生徒すら聞こえない小声でずっと話していた。

「いやあ〜【エレメンティスト】は最高だね、受験のときも思わず観てたよ。」

「勇哉は『ラスト・タスク』はやってるの？」

【エレメンティスト】とは、最近若い世代で流行っているアニメのことである。世界設定は現代とさほど変わらないが、精霊を操る能力者『エレメンティスト』が闊歩している世界とある普通の青年が希少性が高い【風】の能力者となり、戦いに巻き込まれる在り来りのアニメである。

また『ラスト・タスク（Last TASK）』とは【エレメンティスト】の完全体験型のゲームで、自らがエレメンティストの世界に飛び込み、【エレメンティスト】となって《任務》を達成していく、シュミレーターの精度がかなり高くなった現代ならではのゲームである。パソコンの高い情報処理能力のおかげで、約100000000000通りの技が創れるため『廃人ゲーム』とも認知されている。

「受験勉強の気晴らしだからそこまでやり込んでないが、ある程度ならできるぞ。まあそもそも『タスク』は男なら誰だってやってるし、ヒーローになるのは【男のロマン】だしな。アメリカにもあっただろ？」

「確かにあったけど、人がいっぱい諦めたよ。あっちの人気は

異常だからね。」

「なら今度連れてってやるよ、穴場があんだ。」

「えっ！？ホントっ！？！？」

「ああ、かなり荒んだ場所にあるから昼間しか行けないが。——
—おつとおつかない先生がこつちを見てる、静かにすつか。」

「…そうだね。」

勇哉は目線の先には、無勢とこつちを睨んでいる女教師がいたの
で二人は会話を止めて壇上を見上げた。

「——では、最後に生徒会長の【氷室秋子】ひむろあきこさんからのお話で
す。」

——氷室…？

空中に浮かぶ画面に風子と瓜二つの女子生徒が映り、新入生に微笑んだ。

確かキャプテンの名前も氷室だった…よね、もしかして姉妹なの
かな？

秋子はニツコリを笑い、ゆっくりと口を開いた。

「——皆さん、こんにちば。新生徒会長の氷室秋子です。今日
から由緒正しき神流学院に入る皆さんはこれから楽しい日々が送る
でしょう。しかしその中には必ず苦しいことがあります、悲しいこ
とがあります。ですが皆さんは絶対に逃げてはなりません、それは
それが皆さんの【糧】となるからです。生徒会はその【糧】を皆さ
んにより得てもらうために、できるだけ手助けすることをここで誓
います。…皆さん、実のある学院生活にしましょう。——以上で
話を終わります。」

簡潔だが、実にわかりやすい秋子の言葉にその場にいた生徒・教
師は惜しめない拍手を送った。

——いい学院生活になりそうだ。

教室に入ると女子特有の香りが充満していた。しかし夏紀と勇哉は慣れたもので、全く怖じけづかずに席を探した。

「おつ、席が真隣じゃねえか。こいつはさらに仲良くなれつつあったな」

「アハハっ！ー！そうだね。」

夏紀は窓側、勇哉は廊下側の席に座った。

「夏紀ってアメリカにいたんだよね？」

「うん、凄いバッターがいっぱいたよ。」

「へえ、凄いな。日本もなかなか強いやつがいたぜ。」

「まあこの前のW・B・Cの時も決勝で当たるくらい日本とアメリカは強かったからね。野球しに行きたいとも思っただけだし、日本人だから日本の学校に通いたいとも思っていたし、日本に来てよかったよ。」

「——へえ、君ってアメリカにいたんだ。さゆリン、羨ましいよっ！ー！」

人懐っこそうな茶髪の天パの女子が夏紀の席に座ってきた。

「でも修学旅行でアメリカと京都のどっちかだから行くかもしねえから行けっかもな、俺の名前は喜村勇哉。んで、相棒の原野夏紀だ。お前は？」

はせがわさゆり

「うちは【長谷川早百合】、親しくさゆリンって呼んでくれたまえヨ。」

「……わり、俺はパス。」勇哉はやはり恥ずかしいので丁重に断った。

「それじゃあ、僕はそう呼ぶよ。さゆリン。」

「いやあアメリカ帰りの『なつキン』はフランクでいいネ」

「なつ、『なつキン』……」

夏紀は早百合の独特の言い回しに苦笑した。

「……なあ、長谷川。」

「なんだい？ ゆうヤン。」

「——お前、三谷中の野球部にいなかったか？確か…、『1番・レフト』。」

「えっ、さゆリン野球してるの？」

「——いやいや【東のミスター】に名前を覚えてもらっているなんて、さゆリン狂喜乱舞だヨっ!!」

早百合は勇哉と無理矢理握手し、ブンブンとふった。

「三谷中の中でお前だけのバットはかなりいい音していたし、バツクホームの球も凄かったからな。お前とは組んでみたいなんて思っていたんだよ。」

「うっわあっ!! 神流に入ってよかったヨ…」

早百合は泣きマネをした。

「…【東のミスター】？」

「おっと、なつキンは知らなくて当たり前かだよネ。中学野球で【東のミスター】と【西のミス】っていう二人の名打者がいて、で、ゆうヤンはその【東のミスター】なんだっ!!」

「へえ〜、やっぱり勇哉って凄いんだ。」

「まあ、凄くないと言えば嘘になるな。」

勇哉の言葉に三人は笑った。

「いっしょおうっ!! ゆかりンとななミンではないか。」

「——さゆちゃん、もう仲良くなっただ。」

「——さすが。」

教室の前の出入口から二人のクラスメートが早百合に声をかけた。ゆかりンと呼ばれた女子生徒は、夏紀たちと同じくらいの女子にしてはかなり背が高い。しかし威圧感がないのは大人しそうだからか。

一方。ななミンと言われた女子生徒は、対照的に背が低く、視力矯正手術が普通に行われている現代ではかなり珍しいメガネをかけている。

「いやいや、ゆうヤンとなつキンが同じ野球部だからサ。流石の私も緊張もんだヨ。」早百合は照れた。

「——僕の名前は原野夏紀、相棒の彼は喜村勇哉。二人共々よろしくね。」沈黙しそうになったので夏紀はすぐに自己紹介を始めた。

「よろしくうっ!!」勇哉は早百合にテンションを合わせて言った。

「——私の名前は【山江ゆかり（やまえゆかり）】。趣味はアロマで、部活はバスケットに入る予定、よろしくねっ。」

ゆかりは優しく言った。

「——名前は【二階堂奈々（にかいどうなな）】。趣味は写真、部活は新聞部。……よろしく。」奈々は一通りいうと、メガネのフレームを摘まんだ。

「……もしかして、そのメガネってカメラを内蔵してる?」

「……えっ!? マジでっ!?!?」

勇哉は夏紀の言葉に驚いた。

「おおっ!! なっキン凄じぜっ!!——発で当てやがったヨっ!!」

「夏紀くん、よく分かったね。」

「…………驚いた。」

「アメリカにいたとき使ってる所を見たからね。でも人に断りなく撮るのははつきり言って頂けないな、人によっては不愉快に思う人がいるから気をつけた方がいいよ。」

「…………」

「…………」

「…………気をつける。」

「うんっ」

夏紀の心からの優しい笑顔を見ると、4人には夏紀の回りに花が咲いたかのように思えた。

「……ねえ、夏紀くん。」

「なに? ゆかりさん。」

「——【女殺し】って言われたことがない？」

「……………なんで知ってるの？」

夏紀はゆかりの凄みのある顔にたじろぎながら言った。その言葉にやっぱりと4人は零す。

「そつ、それにしても同じクラスに2人も野球部員がいてくれるなんて助かったよ。」夏紀はすぐに話題を転換しごまかした。

「そうか？普通のやつでもある程度は事情は分かるだろ？」

「でもプロ野球の話とかついてこれないじゃん。」

「それもそうか。」

「——なつキン一つ間違ってるよ。」

「えっ？」

「Aクラスに野球部は4人サ、ほらあの子…。」

早百合は指差す。

その先には一人黙々と読書をしている可憐な美少女がいた。緩やかにウエーブする綺麗な銀髪が腰より少し上にまでかかり、端正な輪郭と均整がとれた瞳、そして大人な雰囲気の中唯一乙女らしい甘いピンク色の唇。まるで名画から生まれたような完璧な美しさを纏っていた。しかし今まで二人を気付かせなかったのは、流れる小川の中あるのが当たり前と言わんばかりの小鳥の態度だからか。

「うお…超美人じゃねえか…」

「……………まさかあの子が野球部って言わない…よね…？」

夏紀は【あの女神】が、あの激しい戦いの中にいることが信じられなかった。いや、信じたくなかった。

「そのま・さ・か、だよん。一昨日様子見にここのグラウンドに行っただけどネ、あやヤンはキャッチャーでもういたよ。」

「しかもキャッチャーっ!？」

「マジかよっ!？」

二人はジロジロ見ないようさつさと目線を戻した。

よりにもよって一番危ないポジションを…? ——でも、この子には無理そうだな。

「ちなみに名前は？」

「…【綾小路彩音】^{あやのこじにあやね}。多くの銀行を束ねる綾小路グループの令嬢。一貫生。特技はピアノと野球。座右の銘は『戦いに勝つは易し、勝ちを守るは難し。』」勇哉の質問に奈々はすぐに答えた。

「やっぱり令嬢さんか…？　つか、それ何の言葉？」

「20世紀頃に活躍していた、名捕手かつ名監督の『野村克也』さんの言葉だよ。」

…骨の髄まで捕手なんだ。

「———というか奈々ちゃんよく知ってるね。」

「…私も一貫生だから。」

「へえ。」

一貫生とは【神流学院中学校】からエスカレートして高校に入学した人をさす。通常の高等学校は一貫生が一般生より授業が進んでおり別のクラスにするのだが、神流学院高等学校は入学試験を他の学校よりも高校の内容を入れ難し、高校から入ってきた生徒も同じクラスにしている。

「———うおゝすつ、席につけ。ガキども。10秒以内に座らなかつたら反省文5枚だ。」

「うおつ！！やばスつ！！」

名簿でばんぽんと肩を叩きながら入ってきた、傍若無人な態度の女教師の言葉に生徒たちはわらわらと席についた。

「———ううゝし、全員席に座ったな。いい子だ。先生はいい子が好きだぞ？…さて、今日から貴様らのお守りを担当することになった【木ノ下碧】^{きのしたみどり}だ、ありがたく思え。ちなみに数学を教えていて野球の顧問だ。だから呼ぶときは木ノ下先生か監督だ。それ以外は認めん。私のことについての細かいことは聞きに行い。ここで言うのは面倒だからな。以上。」

鋭い目付きに、短い黒髪がさらに気が強さを表した。

とんでもない人が監督なんだ…。

夏紀と勇哉は内心ひくついた。

木ノ下はもう一度見下すように教室を見回し、再度口を開いた。

「…さてと。自己紹介云々は後でやるとして、今日やらねばいかんことは『委員を決めること』だ。とりあえず学級委員は…綾小路、お前がやれ。」

「はあ…またですか。」

彩音の綺麗なソプラノボイスが教室に響く。

「ああ。監督命令だ。」

「はあ…相変わらず傍若無人ですね。——学級委員は二人ですから、もう一人を私が決めてよろしいですか？」彩音はゆっくりと机の間を通り、壇上にあがる。

「いいぞ。誰にする？」

「——窓側に座っている男子、あなたにするわ。」

「………えっ？」

「つまり…僕？」

夏紀は目を丸くして自分を指差す。

「ええ。あなたにするわ。壇上に上がって書記をして。」

「はっ…はい…」

堂々とした彩音の態度に夏紀はいそいそと前へ出る。彩音の言葉に教室はざわめいた。

「あなた、名前は？」

「…原野夏紀です。」

「そう。いい名前ね。…では、委員を決めます——。」彩音は黒板と自動連動する教卓に固定してあるボードに夏紀が書き込む準備ができたのを見て言った。

「——あつ、あのっ！！」

ゆかりが手を挙げた。

「なんですか？やりたい委員があるならまず名前を言って——」

「いやっ、違うんです。」

「…なんですか？」

「あつ、あの…出来れば夏紀くんを選んだ理由を知りたいんだけ

ど…。」

ゆかりの言葉を皮切りに、生徒たちがどうして選んだのかとわーわーと騒ぎ立てる。

——パアアン…

教室に名簿がたたき付けられた音が響く。

「…黙れ。五月蠅い。」

木ノ下のどすが利いた声に生徒たちは一瞬にして沈黙する。

「…綾小路。理由を言ってやれ。じゃないとまた騒ぐからな。」

彩音は木ノ下を一瞥し、口を開いた。

「…彼が『野村克也』さんを知っていたからよ。」

「…はっ？」

勇哉は思わず言ってしまった。

「私の座右の銘を聞いてすぐに『野村克也』さんを連想させるほど、彼は『野村克也』さんを知っている。だから仲良くなれそうだと思ったの。…いけないかしら？」

これが今後球界に伝わる【原野夏紀】と【綾小路彩音】の出会いであつた。

このとき、夏紀はこの出会いに将来感謝することを知らなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3792k/>

Coffee Brake

2010年10月14日00時48分発行